

特集「生と死の省察」

Theme: Perspectives on Life and Death

対談

仏教思想の生命観

脳死・臓器移植等を見つめて

梶山雄一・屋嘉比康治

基本としての五蘊説

——最近では、脳死や臓器移植、体外受精、中絶などに加えて、遺伝子操作、組替えなどのバイオテクノロジーの諸問題が、これまでの人間の生命観とか人間の尊厳観に対してあたかも挑戦するかのようになり、次々と起こってきております。これに対して、今日は特に、



梶山雄一氏

仏教の立場を中心として、どのように考え、対応していくべきであるかについて、いろいろと論じあっていると思います。

初めに、仏教学者である梶山先生にお願いしまして、仏教の基本的な教義に基づいて、今日の諸問題を捉える視点と見えますか、見取図のようなものを提出していただいて、後はそれをめぐって自由に論じあっていただきたいと思います。

梶山 そうですね。私の方からは、特に最近考えていることですが、臓器移植や脳死などに代表される諸問題に対応する、仏教側からの一つの視点として、五蘊説が大変重要ではなからうかと思っておりますので、そのへんから入ることにしましょう。

五蘊説というのは、間違いなくお釈迦さんの直接の言葉といつてよく、一番基本的な教えであると考えていいわけですが、周知のように、人間の個体存在を構成している要素として、色・受・想・行・識の五つを挙げられます。色というのは、物質的な存在、これには身体と環境を含めていいわけです。次に、受というのは感覚とか



屋嘉比康治氏

感情とかにあたり、想とは表象作用、すなわち我々が感覚した後に頭の中に持つ対象のイメージと「これは机である」というような概念とを併せて表象という。四番目が行で意志ですが、これは欲望などを含めていい。五番目が識別作用、つまり我々の考える働きとなります。そして、この五つの集まりの五蘊によって、全ての現象が尽くされるのであって、五蘊の中にも外にも、仏教以外の宗教家や思想家が考えるようなアートマン（自我といったようなものはないというのが五蘊説です。

アートマンというのは、お釈迦さんの時代のインドでは変化しないので、自己同一性をたもって、永遠に続く主

体である実体をいいますね。我々の言葉でいえば、靈魂みたいなものです。そういうものはないということですね。

この五蘊説がお釈迦さんの一番、基本的な教えになっているわけですが、これに対して、我々の普通の生き方は、それぞれの人が自分の中に靈魂とかアートマンというものがあつて、それが中心になつて、周囲の他の人間であるとか動物であるとか山とか川などの自然であるとかを見渡している。ということは、それぞれの人が自我を中心とした円としての世界を持ち生活をしているわけです。だから、人間の数だけの円があるといつていいわけです。そういう、いつでも自己を中心にして周囲の人間や動物や自然というものを見ているような、自己中心的な生き方をお釈迦さんは否定した。つまり、円の中心になる自己とか自我とかエゴとかは五蘊というものの中にも外にもない、ということというわけですね。

そうすると、中心というものがなくなつてしまふ。そして中心がなければ、自分と他人、動物、自然などがすべて、私も五蘊をもつて生きている、他の人も五蘊を持

つて生きている、というだけであつて、そこに中心になるような自己とか自我というものはない、という世界が開けてくるわけです。全ての生き物が同じ五蘊だけを持つているとすれば、私と他人の区別もなくなつてしまふような世界になつていくわけです。このような五蘊という考え方が基本にあつて、無我とか慈悲という考え方が出てきて、そして我々の他人に対する、また動物や自然に対する生き方というのが仏教では決まつてきているわけです。

仏教で慈悲といえば、お釈迦さんの伝記の中とか、あるいはよく引用されるジャータカ(本生譚)などに、慈悲というものの事例になるようなことがたくさんあります。しかし、そういう個々の物語や伝記というものではなく、やはり仏教の教義や思想としては、慈悲の基礎になるものは五蘊説でなければならぬ、と思いますね。というのは、五蘊説というものがあつてこそ無我ということを通して、自分と他人とが一つになつていく、というような立場が開けてきているわけですから。

このように見ていくと、たとえば臓器移植という問題



対談中の両氏

であつても、五蘊説とか無我という、自と他との区別のない生き方や世界というものからすれば、自分の臓器を、それがあれば助かる方があれば、その人に与えるということは当然のこととなつてくるわけです。

さらに、仏教の場合、考えておかなければならない問題は、業報輪廻ということです。

新聞や雑誌等でよく引用されるジャータカ物語の一つに、「捨身飼虎」の物語というのがあります。これは、子供を生んだばかりの母親の虎が、食物を得られずに飢え衰えていて、空腹のあまり自分の子供を食べようとした時、これを見ていた王子が、飢えた虎の前に行き、そこに落ちていたトゲのある小枝を拾つて、それで自分の体を突き刺す。流れた血を見て食欲に駆られた虎が王子を食い、元気を回復して子供を育てる、という話です。

これは布施行ですが、虎に食われる前に王子は「自分は今まで生まれ変わり死に変わりして現在まで輪廻転生を続けてきたけれども、今までは己の愛欲のため、憎しみのため、愚かさのために、ろくなことはしてこなかった。せめて一度ぐらいは、生きものを救うために自分の身を

犠牲にして死んでみたい」と言っているのですね。この王子のような考え方が出てくるのも、輪廻の考え方があからずです。

輪廻というものは、現在でも、インドやチベット、東南アジアの人々とか、仏教圏の中で輪廻を疑わない人達にはたくさんいるわけですが、昔の仏教徒というのは、輪廻の考え方を自分の生き方としていたわけですね。ですから、此の世で死んでも、すぐにまた生まれ変わる、そのように、何度も何度も、生まれ変わり死に変わりしていくのだ、という考え方を持っていた。この場合、輪廻の主体になるのは自我ではなく、あくまで意識です。意識というのは、自我のように変化しないというものではなく、一瞬一瞬、次から次へと変わったものが続いている。ちょうど、鴨川という一つの川を橋の上から見ていきますと、実際はその瞬間瞬間に橋の下を流れている水というのは皆違うのですね。しかもそれが、一つの流れとして「鴨川」と言われている。人間の心とか意識というものもそういうもので、一瞬一瞬違ったものに変化しつつ、しかもそれが一つの流れとして続いていく。そういう

毒のまじった布施では何にもならない。だから、「俺が」とか「あの人」とか「お金」とか「体」を与えたとか、という意識を持っていたら具合は悪いんで、本当の布施にはならないですね。

臓器移植と言う時にはこの問題は必ずつきまといってくるわけで、臓器を提供した人は、自分はおの人に与えたのだといって、ひそかにお返しを期待してみたり、もらった人はもらった人で、もう前に、早く誰かが死んでくれればいい、というような考え方をもちがちなんですが、そういう気持ちがいまひとつ、これは本当の布施にはならないわけです。そこで、仏教でいう「空」という思想に立ち戻って、その臓器移植というものを考えなければいけないと思うのです。つまり、先に「三輪清浄」と言いましたが、三つの輪が清らかでなければならぬというわけですね。

次に仏教では、四無量心というのがあります。慈・悲・喜・捨の四つの心です。この四つは瞑想の中で、これを対象にして、坐禅するということが行われていたわけですが、慈は友情的な愛であり、悲というのは他人の悲し

う意識が中心になって生まれ変わり死に変わりしていくというのが輪廻です。これに業報が加わって、今ここでよい行為をすれば次の世にはもつと恵まれた状態に生まれてくる。逆に悪いことをすれば、地獄に生まれたり動物に生まれたりする、そういう考え方を昔は多くの人が信じていたと思うのです。飢えた虎に体を与えるというジャータカの説話も、根本にそのような考え方があられるわけですね。

生命倫理を考える仏教の視点

もう一つの問題は、仏教では空ということを行います。布施なら布施というものを為す時に、いわば三つの要素を自覚しないで行う布施こそが理想的であって、これを「三輪清浄」といいます。三つの要素とは、布施を行う主体、布施を受ける客体、布施されるもの、の三つです。一番いけないのは、三つの要素を意識して、たとえば私なら私が誰かにお金を布施する時に、俺が彼に金をやったんだという形で意識して為された布施というのは、毒のまじった布施というように経典では言っている。

みを自分の悲しみとするような同情、コンパッションであり、喜というのは他人の喜びを自分の喜びとする心、この三つを挙げて、最後に捨ということなのです。捨というのは、前の三つのような、一喜一憂というような状況を超えて全く平静な状態、喜びでもない悲しみでもない、つまり、慈悲ということすら忘れてしまったような平等で平静な状態を指しています。

また、捨というのは四無量心の時だけに使うのではなくて、快と不快、楽と苦とあつて、そのどちらでもない状態を捨ともいいますが、今の場合は、本当に自分を捨て、喜びや悲しみの感情を超えてしまったような平静な状態をいうんですね。やはり、そこまでいかないと具合がわるいんですね。だから、臓器移植をする時も、感情がまじつてきて、俺が彼にやったというようなことにならないようにしないといけないと思うわけです。結局、五蘊説であるとか空の思想や悲喜の感情を超えた「捨」の平静さに基づいた、三輪清浄の布施というようなものがあつた上で、臓器移植が行われた時には、それは本当に宗教的な意味あいを持つてくるわけですね。そういう

ものがなくて行われますと、いろいろと社会的な問題が出てくるであろうと思います。

屋嘉比 先生から五蘊説など基本的な教義をうかがっておりまして、仏教の場合、普通の我々の意識である、自分や自我に対する執着というものが、一貫して根本的な問題になっているのではないかと思います。たしかに、体外受精についても、たとえば、最近、米国のテネシー州でのことですが、体外受精した凍結卵に関して、離婚する時に、その受精卵はいつたい夫のものであるか、妻のものであるかをめぐって裁判沙汰になったり（笑）、結局、妻に帰属すると判決が出たようですが、こういう現実の問題が出てきているんですね。また、アメリカなどでは体外受精に関係した腹貸し業の女の人がいて、他人の体外受精した受精卵を自分の子宮に植え替えて、これを育てて何万ドルというお金を貰う。その時に、実際に問題になったことは、その腹貸し業の女の人が、お金を貰って育てた体内の子が急にいとしくなりまして（笑）、その後、その子はいともとの夫婦のものか、子宮を貸した自分のものなのか、ということが裁判で争

なことですけどね。

屋嘉比 体外受精の例を挙げましたが、「自分のもの」かどうかを争うような現実の問題にぶつかりますと、僕たちのように医者として、現実生きていますと、人間の諸問題はやはり我や自分、自我というものを前提としなければ一歩も進まない、というように感ずるのです。しかしもっとより深く考えれば、今先生がおっしゃった五蘊説や無我のように、全部一体になって生きているのが、本当の真相かもしれないと思うのですが……。

梶山 それはね、無我というのは一般的には、利己的でないとかの意味に使われていて、それで結構なんです。が、それと同時に五蘊説という時には、一種の存在論みたいな形で、人間の個体の存在要素はこの五つである、これ以外に自我はない、というわけですけどね。自我に対する執着を持つということが人間の一番基本的な誤り、無明ということになります。無明というのは、個体存在の真相は自我が無く、五蘊の集まりにすぎないものであるにもかかわらず、これに執着して、俺が、私だと考える、それが無明であるということで、基本的な誤り

われたりするということがありました。

梶山 それはありえますね。ちょっと、前に書いたことがあるのですが、『阿毘達磨俱舍論』の中に、今の事例とよく似た話が出てきましたね。ある女の人が妊娠して、まだ胎児がカララという初期の段階で、液体のような状態の胎児を流産するんですね。そばにいた別の女の人が急いで拾って、自分のお腹の中に入れてしまっ、そして育てるんですね。そんなことが実際にあったかどうかはわかりませんが（笑）。そして子供が生まれたと。『俱舍論』で問題になっているのは、その子供が仮に母親を殺したとする。仏教では父親を殺したり、母親を殺したりすれば、五逆罪という、たちどころに地獄に堕ちるという罪になるんです。だから普通の人を殺すのと親を殺すのでは違うわけです。どっちの母親を殺せば五逆罪になるのかというところから、この話が問題として取り上げられているんです。結局のところ、本当の母親は流産した方の母親である。だから、その場合には尊属殺人が成り立つのであって、もうひとりの養母のような人の場合は必ずしも五逆罪にはならないというよう

なのです。

屋嘉比 そうしますと、臓器移植などでも、たとえば自分が臓器をあげたのであるとか、彼から臓器をもらっただんだとか、自分の我を中心にして考えていくこと自体が臓器移植の在り方を誤らせることになる。

梶山 それはたしかに良くないですね。平川先生が『東洋学術研究』第二十七巻第二号に書いておられたけれど、もう一方はですね、他人が早く死ねばいいと思って心待ちしていたり、あるいは、ある所から聞いた話ですけれど、臓器をあげる方が「自分の臓器をあげます」とドナー・カードに書いてあるんですが、但し書きがついていて「この人だけにやってはいけない」（笑）という、そういうことになるね、どうも、せっかくの慈悲行が意味がなくなってしまうのですね。

さっきの飢えた虎の話でも、やはり布施、慈悲として考えていいわけです。經典には、非常に極端なことが書いてありましてね。ここでは菩薩として人を救うためならば、自分の手や足はもろんのこと、骨から髓や心臓まで取り出してあげてしまおうというような記述があるわ

けです。でも、最後に梵天が現れてまた、元通りにしてやるんですがね。しかし、その一番の基本には、さつきも言いましたように、輪廻説がありまして、死んだからといってそれで終わりではない、また生まれ変わって、悟りへの修行を積んでいくという考え方があったにちがいないのです。

で、この業報輪廻の考え方との関連で、一番、問題になるのは、おそらく遺伝子操作や組替えの問題であろう、と私は考えているのですが、現在、遺伝子操作はどういう状況なんですか。

屋嘉比 現在、遺伝子操作の問題に関しては、遺伝子治療の可能なもの、たとえば、いろんな酵素が欠損している病気とか代謝の病気とか、それに対して、受精卵の段階で、その欠損が分かっていたら、遺伝子を足してやるといった遺伝子治療のようなものはいろいろなことを目標にしているようです。

梶山 そのような病気の治療といった方面に生かしていけばいいわけですね。しかし、遺伝子の組替えや遺伝子の組立てはこわいですね。やりようによってはね。

間に決まっていって、いわば、その命の長さを支えている一つの能力として考えられているんです。ですが、三つの中では中心は意識なんです。この三つは相互に支えあうんですが、その三つが体から離れた瞬間が死であるとしているところからすると、心臓死は無視しているわけではありませんが、僕は仏教の死は脳死に近いと思うんです。ただ、昔の人は心臓と大脳との区別がはっきりしていませんでね、心臓に心や意識があつて、そこで考えられているところがありますね。インドの記録によると、十七世紀になってから、心臓が考えたり意識を持つわけでもないことがわかってきたらしいんですがね。いずれにしても、近世までは洋の東西を問わず、心臓が考えたり、神経中枢であると思っていたようですね。その混乱はあるわけですがね。

今度は仏教で、生まれるということはどういうことであるか、という輪廻するわけですから、ある下意識のようなものがあつて、それがお母さんのお腹の中に入った瞬間、それが生まれたということなんですね。だから、体内において胎児が成長していく過程も生命ということ

つまり、遺伝子を組替えることによって、いろんな人間ができたり動物ができたりするというのは仏教にとつて非常に困ることなんです。というのは、お釈迦さんの教義というところまではいきませんが、一般の業報輪廻の考え方からすると、人間は悪い行為をすれば地獄へ堕ちたり餓鬼や動物に生まれたりするが、善い行為をすれば天に生まれたり幸福な人間に生まれたりするという。つまり行為が未来を決定するわけでしょう。ところが遺伝子の組替えで、突然、違った生体ができしまうと、行為とは無関係に、組替えだけで人間になったり動物になったりするということになると思います。

仏教における生と死

また、脳死の問題ですが、仏教では昔から、各学派や部派に通じて考えられていることですから、死というものには意識が中心になるんですね。もちろん、意識だけではなしに、意識(識)と体温(煖)と寿命(寿)の三つのものが自分の体から離れていった時が死であるとしています。で、寿命というのは生きる長さというものが生まれた瞬間

になりますから、墮胎とか中絶とかは明らかに殺人なんですね。

屋嘉比 受精の瞬間には意識がある、ということですね。

梶山 受精の瞬間です。だから、それ以後はもう人間としてあるわけですから、それを殺すということは仏教の考えではできないわけですね。死ぬ時も、先ほど言ったように、識、すなわち普通の自覚される意識、第六意識ですが、これと体温と寿命とが離れてしまったら、死である。どこまでも、生も死も意識を中心にして考えているわけですね。もちろん意識だけではなくて、非常に微細な、物質的な要素も意識にくっついて受精され体内に入ると考えているらしいんですが……。しかし、中心は意識ですね。仏教の場合、難しい点もありましてね。眼・耳・鼻・舌・身・意の六識の第六の意識がなくなってしまうたら、死ぬんですが、ところが普通の意識のものと底に下意識というか、我々の自覚にのぼらないような、もう一つの根源的な認識、下意識的な心があつて、それは死んで普通の意識が離れてしまってもなくなってしまう

うのではなく、続いていてまた生まれ変わると考えているんですね。これは唯識学派の阿頼耶識だけではなく、他の学派でも、さまざまな名称で考えています。たとえば、化地部の窮生死蘊、これは生死、つまり人間が生き変わり死に変わりして生存を続けているその一番の深層の処にある、根源的な下意識であると。「蘊」とあるように、意識を中心に五蘊が集まっているようなものなんではないか。それは自覚にのぼらないものなんですね。あるいは根本識、根本的な識で、普通の第六意識よりもっと深い層にあって、この識が生死流転している間をつないでいく。セイロンの上座部では有分識、「分」とは因のことで、「有」というのは生存のことですから、つまり、生存の原因である根源的な識、これも下意識なんですね。このように小乗仏教でも下意識的なものがあった、それが死と生の間をつなぐと考えている。それが大乘になると、第八阿頼耶識という形で出てくるわけです。なぜ、このような下意識とか阿頼耶識というのが出てきたかといえばね、いつでも問題になるのは滅尽定というのがあり、これは瞑想、三昧の一つですが、ここに入る

と全く普通の意識はなくなるんですね。そして、呼吸はあるが死んだようになってしまう。そういう形で瞑想がある期間続くのです。長い時には数週間位続くこともあるようです。

屋嘉比 それは昏睡とは違うんでしょうか。

梶山 まあ、昏睡に近いでしょうね。しかし、仏教では滅尽定を絶対の静寂である涅槃に近いものと考えています。滅尽定に入っている時には、側に人がいて水をやりたりしないといけないんです。まさに、脳死状態に近いですけどね。しかし、問題は、滅尽定に入っている時には、とにかく通常の意識が消えてしまった絶対の静寂の境地で、思考作用などはなくなっちゃうわけですね。ところが、ある期間たって、坐禅を止め、立ち上がる時には、また意識が回復するわけですね。それはどういうことかと。これは熟睡の場合でも同じです。熟睡の場合はやはり夜寝て朝起きるまで意識が全くないですね。しかし、朝になると意識が出てくる。気絶でもそうです。そうするとやはり、意識がなくなった期間をつなぐ、ギャップ・ブリッジャーが必要であると。それが下意識と

か阿頼耶識というものになっていく。一番最初は滅尽定とか気絶とか熟睡とか無意識状態がある期間続いて、それからまた意識が戻ってくるのはどういうわけかということ、普通の意識とは違ったもつと深い意識があるはずだ、というところからはじまるんです。ところがそれが、今度は一つの生命と次の生命をつなぐ架け橋になる、というように考えられていく。阿頼耶識というのはそのようにして出てくるわけです。

屋嘉比 今の先生の話によれば、阿頼耶識自体は生死を超えて続いていく下意識であるわけですが、これは、靈魂やアートマン(自我)とは違うわけですね。

梶山 全く違います。靈魂やアートマンは先ほども言いましたように、絶対に変化しない、ひと続きの実体なんです。これに対して、阿頼耶識は「常に転ずる」といって、一瞬一瞬に変化しているんです。そこは因果関係になっていて、今の私の瞬間の阿頼耶識が原因となつて、その次の瞬間の阿頼耶識を結果し、それがまた原因となつて、次の瞬間の阿頼耶識となつていくというように、ずーっと次から次へと因果関係が続いて一つの流れ

になっていく。その流れのことを「相続」というんです。

屋嘉比 そうしますと、阿頼耶識というのは死を一つの原因として、次の生が生まれてくるということ、その後も続いていくんですね。

梶山 死によって第六意識はなくなりますね。阿頼耶識は、一つの生を終えた後、次の生へと続いていくのです。

屋嘉比 脳死の場合でいいますと、今の意識と阿頼耶識の関係はどうなっているのでしょうか。

梶山 通常の第六意識が去ってしまうのが死ですから、当然、脳死はこの中に含まれています。しかし、阿頼耶識はもつと深いところであつて残っているわけですから、脳死になつても、阿頼耶識はなくなることはなく続いているんです。だから、一般に生とか死とかをいう時は、表層の第六意識のレベルで考えるわけです。阿頼耶識という深層のレベルでは、死んでも、それが次の生へと続いていくように考えているわけです。

屋嘉比 そうしますと、脳死状態に陥った状態の時に(この時点を何時にするかは難しいのですが)、既に中有に入

った、というように考えるわけでしょうか。

梶山 そうなると思います。仏教の場合は、肉体というのは余り考えませんからね。脳死になってしまえば中に入ったということですね。

屋嘉比 なるほど。西洋ですと、人間の人間たる所以というのは、理性を中心に考えますよね。理性がない場合は人間としての死であると。すると、脳死の時点ではもう理性が働かないわけですから、表層的なものかもしれないませんが、理性がなくなった時点で、人間としての死なんだと。人間としての生はありえない。そういう場合は脳死を認めて、臓器移植に直接つながるわけではないにしても、臓器を取りだせる完全な死体と見ていくという考え方が基本的にあります。そういう場合の理性というのは仏教から言えば、やはり意識のレベルでしょうか。

梶山 それは、そうですね。我々は知覚として眼、耳、鼻、舌、身(肉体)という知覚を持っていますが、もう一つ考える理性、意識というのがあります。それが第六意識ですね。ここを中心に生とか死とか一往分けるんです。東洋の考え方は体に執着するということは初めから仏

能停止というのが、脳死の判断の基準みたいなんですね。そうしますと、批判する人たちは、本当に脳の機能は元にもどらないのかと。その証拠はどこにあるのかというわけですね。

梶山 それはしかし、心臓死の場合だってあるんじゃないですか。本当に死んだか、どうかというのは……。だから、僕はそれだけで批判するのは、どうかと思いますけれどもね。

屋嘉比 批判の根拠は、いろいろあるんですが、一つはもつと証拠を集めよ、ということです。

たとえば反証の中で一番有力なのは、脳に血がめぐっていないという証拠ですね。血流が完全じゃない、ということとを証明できたら脳死を認めようと。なぜかといえば、脳というのは、非常に酸素に敏感でして、数分も酸素補給が止まりますと、完全に不可逆的な変化を生じてしまうんです。ですから、血が行かないということは、脳という組織自体がだめになるということで、そこまでの証拠を出せといっているんです。機能停止だけなら、ただ機能が眠っているだけかもしれない、脳自体がどろどろ

教やヒンドゥ教にはなかったと思いますね。まあ、日本の神道などは別にして、体というのは余り大事ではないんです。意識や下意識が問題であってね。だから、ヒンドゥ教徒は大昔から死ねば体を火葬にしていますよね。日本の仏教でもそうですがね。だから、火葬にするという

ことは、肉体というのを生命とは考えていないことですよ。焼いちゃうわけですから。肉体に執着しないというのは、ジャータカの物語にいくらも出てきますからね。だから、脳死についていろいろ議論があるようですが、脳の不可逆的な死が確実に判定できれば、私個人としては認めてもよいのではないかと思いますね。もちろん脳死にまつわる問題はありますよ。その前に、脳死の判定そのものは、そんなに難しいことではないんでしょう。

脳の物質性と非物質性

屋嘉比 そうですね。今までの厚生省とか日本医師会の発表した、基本的な脳死の定義の内容というのはどうも機能死みたいなもので、もう働かないと。しかもその機能がもとにもどらないというような脳の不可逆的な機

に溶け始めたというところまでの証拠が出たら、脳死と認めようといっています。

というのは、もどる可能性があるのにもかかわらず、脳死ということで殺されているのではないかとという批判がよくあるんです。ですから、この批判に答えるためにも基本的には、もう少し検査を厳密にするとか、もう元にもどらないと言えるような現実の証拠を捉えることが重要ではないかな、とは思っています。ただ、基本的には、厚生省とか医師会とかの基準は普通は間違いないような定義ではないか、と思いますけどね。脳死の問題というのは、その辺が厳密に言えば、たしかに問題なんです。脳死でいつも問題になるのは、臓器移植をさせて、死んでいく人を早く脳死にしちゃえ、というようなことになる危険性でしょうね。そこに先生のおっしゃった欲望の問題や私の問題が出てくるわけですね。医者の場合には、そのあたりをもつと慎重に検討する必要があるわけですね。それから、病気の人の都合によって、脳死になる人の都合を考えない、という面もございますね。その意味では死んでいく人は大事にしなければならぬ。そちら

に決着をつけた段階で、臓器移植を考えるべきであるという考えがあつて、医者からすれば、こちらの方は必ず死ぬと、こちらの方は臓器移植で助かるんじゃないかと思うと、どちらかといえば、助かる方に眼が向いてしまうところがあるんですね。

梶山 それは、そこに利害が入りこんではいけません、こつちの人が死ねば、その臓器によってこちらの方が助かることとは決して悪いことではないでしょう。脳死の判定の処はお医者さんにまかせる以外にしようがないでしょうね。

ところで、脳自体は物質でしょう。

屋嘉比 ええ、物質ですね。

梶山 脳の働きというか、精神作用は必ずしも物質とはいえないでしょう。

屋嘉比 ええ、非物質的なものです。有名な話ですが、カナダの脳生理学者にワイルダー・ペンフィールドという人がいて、癲癇の治療の大家なんです。この人が癲癇の治療を目的として、どこに人間の心があるか、という問題意識をもちながら、電極で患者の脳にいろいろな刺

激を与えたのです。ところが、どこを刺激しても人間が判断するとか、ものを信ずるといふ心が出てこなかった、というんです。そこで彼は人間の心や我というのは、機械的な刺激や作用だけでは出てこないということから、心は脳を越えて存在していると結論しているんです。彼自身はキリスト教徒かもしれませんが……。また、エックルスというやはりノーベル賞を受賞した脳生理学のお医者さんがいます。脳にはいろいろな機能的な地図があつて、手を動かすとか足を動かすとかの部分があるので、すが、彼が言うには、補足運動野というのがあつて、人間がものを考えて何かをする時には、まずそこが動くというんですね。つまり、行動の内容がインプットされている「目録」を探すように動く。そこで、あるパターンを見つけて命令するというんです。このように脳自体が探し動いているというところから、脳はただ機械的に動いているのではなくて、脳を動かしているところのもの、いわばコンピューターを操作するものが、どこか別にあるのではないかということを彼自身『心は脳を超える』という本の中で書いています。

梶山 たしかにコンピューターは、ほついたら動きませんからね。

屋嘉比 今は代表的な二人の脳生理学者を挙げましたが、脳の医者の多くは、心というのは脳という物質的なものだけではなく、やはり、物質的なものを超えて存在しているなにかがあるはずだ、ということを経験の念のようにしています。その意味では、脳死の問題は、そういうものが存在するのかもしれないということが、大きな問題で、たしかに自分の意識や肉体を形成しているものが別にあると考えますと、脳死の考え方にも多少の幅が出てくると思うのですがね。

医者自身も、これからはいろいろな新しい生命現象にぶつかつて、やはり単なる機械ではないと考えさせられる機会がたえず出てくるのではないでしょうかね。

体・心を支える「妙なもの」

屋嘉比 一つの問題として、脳死になつてからも、心臓が止まるまでは数日かかる時があるんですね。つまり、脳が死んでも心臓は動いている。ということは体が機械

的に惰性として動いている、といえる面ともう一つは心臓が止まるまで、何らかの形で意識のようなものがコントロールしているのではないかと考えられる面とがありまして、もし後者だと脳死になつても、その人の意識のようなものが去つていないといえますかね。そういうように考えることも可能であると思うんですね。これをどう捉えるべきであるか、とも思つたのですが……。

梶山 そこは難しいところですね。表層の意識は去つていきます。その場合、心臓が止まる、止まらないということは仏教的には問題にならないと思いますよ。

問題になるのは意識で、意識を一往物質とは区別しますからね。そして、その意識がなくなった時が死です。しかし、阿頼耶識のような下意識はずっと次の生まで続いていくということです。だから、今の心臓というのは肉体的、物質的存在で余り重要視していないと思いますがね。だって、心臓というのは機械で動かせるわけですから……。

屋嘉比 ただ人間の体の不思議さというのは、見事なバランスと協調から成っていますね。その体を支えなが

ら動かしているものは非常に「妙なるもの」であるとし
ますと、たとえ脳は死んだとしても、まだ肝臓は生きて
いますし、心臓は生きていますし、腸も吸収している、
という意味で、「妙なるもの」はまだ機能している面が
あるわけです。そう考えますと、普通の機械とはまた違
いまして、脳死になって意識はなくなっても、意識の深
層にある生命の出現を成り立たせているものがまだ体の
中にあるのではなからうか、ということは考えられると
思うのです。

梶山 それはやはり、誰が作ったのかしれませんが、
これほど精妙な人間が出てきたということは、不思議な
ことですからね。難しいところですがね。

屋嘉比 脳死になった場合でも、心臓がまだ動いてい
る間は、生命自体がまだ残存しているとして扱うべきで
あり、心臓が止まった段階で体を成り立たせ、意識を生
じさせている根源的な「妙なるもの」がその時点で冥伏
していくというように考えた方がよいのか、いわば脳死
と心臓死との間のギャップの問題ですね。

私などは、天台大師の空・仮・中の三諦論を、さらに

展開して、空⇨心、仮⇨肉体、中⇨肉体と心を支える生
命の本体そのもの、とする日蓮大聖人の仏法を根拠にし
て考えるものですから、どうしても、たとえ脳死とされ
ても、肉体が微妙なバランスを保ちながら存在している
限りは「妙なるもの」である中諦の働きがまだ残ってい
る、とした方がよいのではないかな、とか思ってもみま
す。次に本当に心臓が止まった段階で、「妙なるもの」
は次第に、宇宙へ完全に冥伏していくと考えられる。そ
の「妙なるもの」が体から引いていく段階で、まず表層
的な意識が消えていき、体の働きが完全に止まった段階
で、その人の生命が宇宙と一体化して冥伏していくとい
うふうにみるべきかな、などと思ったりしているのです
が……。

梶山 素晴らしい考え方であると思いますがね。体を
大事に考える点では唯識派以上ですよ。なにぶんにも阿
頼耶識に興味を持っている唯識学派では、非常に観念的
で、要するに外界の物質というものは存在しないんです
ね。この世界というのは阿頼耶識が変化して出てくるも
ので、物質も実は阿頼耶識だ、と考えてしまうんです。

あのままではやはり現代に通用しない、と思います。唯

識の考え方も、表層の意識と肉体というものを通じて、
それらの底にあるような生命のようなものとして阿頼耶
識をとらえていけばね、面白いとは思いますがね。だか
ら、解釈は我々が行うべきだということになるとしてい
ます。特に、唯識はインド的な宗教で、中国の玄奘の頃ま
では非常に盛んでした。日本仏教の中で、唯識学派とい
うのは奈良時代の法相宗で終わってしまうのですね。そ
れは余りにも観念論的だからです。ヘーゲルの哲学にお
いて、絶対精神から精神的なものも物質的なものも皆出
てくるのですがね。阿頼耶識をそのようなものとして考
えることもできますし、その比較はやってみると面白い
かもしれませんよ。

屋嘉比 人間の場合、意識というのは非常に重要であ
ると思うんですが、医者としては体も非常に不思議な存
在であると思うんです。

梶山 仏教のなかでは、真言は非常に体を大事にしま
すから、そのような考え方が出てくるのではないですか
ね。

屋嘉比 体の存在全体もそうですが、特に脳などは非
常に不思議な存在で、単なる進化論的な可能性だけでは、
この存在は説明できない「奇跡」であると思うのですね。
その存在を作っている働きというか、これを支え、かつ
体として現れ出ている妙なるものが宇宙の進化に同調し
ながら、人間やその脳を形成してきたことを考えた場合
は、意識の存在自体が不思議であると同時に、体がまだ
存続していることの不思議さをも考えて、脳死などの問
題も考えていかないと解釈しきれない面があると思うの
です。

梶山 たしかに、教義としては阿頼耶識というのは下
層の意識で、それが物質を取り込んでしまっているのだ
ですね。精神的なものと物質的なものの双方が阿頼耶識の
中に含まれてしまうということまでは出てくるのです。
しかし、今言われたことは、唯識のように意識の方に余
り偏らせないで、物質の奥にも何かあるというような方
向の論議へと発展させる必要がある。

屋嘉比 医者から見ると不思議なんですね。体とい
うのが……。体は人間が作れるものでないし、物がただ漫

然と組み合わせることができるものでもない。あくまでも、非常に奇跡的に成り立っているということが宇宙的なもの作用を考えてしまうのです。

脳の機構を超えてさらに成り立っている妙なものという考え方は仏教にはないのでしょか。唯識ではありませぬね。

梶山 ええ。だから唯識というのは、心だけというように考えないで、心と物質の両方を含むようなものとして考えることはできないことはない。かなり解釈しなおす必要はあると思う。

脳死の社会的合意をめぐって

屋嘉比 脳死の社会的合意は今の段階ではなかなか固まっていますね。その理由の一つとして、日本人独特の身体観といえますか、死んでも死体に魂があると考えたり、骨に対する異常な執着などが挙げられるように思うんですが……。

梶山 それは日本の仏教が神道とか道教とかとまじり合っているということもありますね。日本人というのは

おかしいところがありましてね。平川さんも言われていると思いますが、戦争で死んだ人の遺骨収集で、ビルマその他のかつての戦地に出向くというのは、そんなことはキリスト教ではやりませんよ。ちょっと異常だと思うね。少なくとも仏教ではないですよ。

屋嘉比 中国はそうでもないと言っていました。

梶山 あくまで日本的なものですよ。

屋嘉比 そのように日本人の独特の問題はあるにしても、仏教から見ても考え方としては、脳死というのは許されるのではないかと……。

梶山 それでいいのではないかと私は思いますね。

ただ、合意というのがどういうことか。合意というのが法律によるか、あるいは法律でなくても、一種の非常に強い世間の慣行ということになりますと、これはかならず弊害が起きてきますね。だから法律を作ったり、合意というものを固めるのがいいのかな。そこにはかなり問題がありそうですね。

インドの「サティ」 という風習の例がありますからね。

この風習は、イギリス人がインドに入った時にも行われていましたから、十八世紀ころまで行われていたのではないのでしょうかね。「サティ」というのは、立派な女ということ。立派な女というのは、夫が死にますと、その夫を焼く火葬の薪の中に自分も身を投じて一緒に死ぬ女ということです。初めは、誰か本当に立派で貞淑な女が夫に殉じて賛嘆もされたのでしょうか。しかし、それが世間の習慣や慣行になってしまうと、そうしなければならなくなるんです。強制的になってしまい、奥さんは死ぬのが怖くて逃げ回っているのを、皆で捕まえて、むりやりに薪の上にのせちゃうという風習となる、それをイギリス人が見て、びっくりして書いているんですね。

だから、脳死の関係でも、それが法律になったり、強い慣行になってしまうと、なんかそうしなくちゃいけないような、無理にでも臓器を提供させてしまう、というような強制的な面がきつと出てきてしまいますね。それがこわいんです。アメリカのようにはっきりした法律を作るのがいいかどうかは問題ですね。

やはり、ドナー・カードのようなもので、自分の臓器は提供していい、ということとを本人が言い、家族もその意志を尊重していく。本人がいいと言っているのに、家族が反対して、臓器移植を止めさせちゃうというのも、どうかと思うんですがね。アメリカでは夫婦の間でね、どちらかが脳死状態になったら、相手方が判断して、臓器を提供するとか解剖してよいとかというようなことを書いた文書を交換するようなことが今大分行われているようです。

屋嘉比 フランスのように、死ぬ前に何か一筆書いておかないと、脳死になった場合は、強制的に臓器をとられてしまう、というような国もあるんです(笑)。

梶山 アメリカの場合と逆ですね。

屋嘉比 だから、自分が臓器を提供したくなければ、いやだと書いておかないと、強制的にとられてしまうという国もあるんですね。国によっては、臓器センター、脳死センターのようなものがある、それがうまくコントロールしながら、脳死や臓器移植の問題を、処理しているようです。

梶山 それはいいんですが、それにまつわる、いろんな問題があるわけなんです。

僕が臓器移植の問題に気掛かりになったのは、三年前にハーバード大学にいましてね、その時、向こうの同僚達と酒を飲んでいたんですよ。たまたまエイズの話が出ましてね。向こうの人達は、アメリカの連中はエイズがこわくてこわくてしかたがないんだという話になってね。日本にはあまりエイズ患者がいらないようだが、日本人はエイズをどのように考えているのかと僕に聞きます。僕は、日本でも大変問題になっていると。最近、アメリカから血液を輸入して、それによってエイズや、白血病に感染したという人がかなりいるので、それで問題になっているんだということを言ったんです。そしたら、そこに居あわせた同僚たちが皆びくくりしましたね。日本人はアメリカ人の血液を買うのかと。その時は僕は血液を輸入しているのか、血液製剤を輸入したのか、どちらか知らなかったのですが、どっちにしろ、血は血ですから、血を買っていることになるんです。アメリカ人にとっては、日本人がアメリカ人の血を買い、使っている

ということは論外なんですよ。血の問題ですら皆、ぎょっとするわけですね。けしからんと。

ところが臓器の問題になると、日本では臓器移植は禁じられているんで、皆オーストラリアやアメリカやイギリスなどに行って移植してもらって帰ってくるわけでしょう。これは、たとえお金の問題や売買の問題が入ってこなくても、それ自体が国際的な問題になりますよ。日本では法律で禁じられているからといって、外国に行つて外人の臓器をもらって生命を延ばすという考え方が国際的に認められるのはむずかしい。

私には血の話の経験があつたものですから、なぜ日本人は外国へ行って臓器移植をするのか、世界の人から見たら日本人というのはけしからんとなって、やがて国際問題になるように思えます。国際問題になるから、臓器移植を止めるというのもおかしな議論ですが、しかし、国際問題として起こってくる前に、臓器移植を許可するというか、日本人が進んで臓器移植をやるようになる方がこのまじいと思うのですがね。

屋嘉比 たしかに病気の家族を持っている人、特にわ

が子のことになりますと、すべてが見えなくなって、どんなことをしても救いたい、ということになります。たとえば、オーストラリアとかアメリカなどへ臓器移植に行くためには最低二、三千万円は必要なんです。そうすると、普通の人では家でも売らないと、資金を調達できませんね。あるいは、有志の方々が助け合う会のようなものを作って、実際に何千万円を用意して行くことになる。これを大きく国際社会の視野で見ると、日本人はエゴイステックで、お金で全部解決してしまおうとしているように、諸外国の人々に映ると思うのですが、しかし、一人のこの病氣の人に焦点を合わせると、親の気持ちも分かるということになる。だから当事者はいろいろな矛盾を感じながらも、外国へ行っているんだろかなとは思っています。

死体腎でも、日本はアメリカからかなり輸入しているのですが、それでもなかなか手に入らないのが実状ですから、今度は逆に日本からアメリカに行つて、アメリカで登録していつでも待っていて移植してもらった方が早いということもあります。

梶山 腎臓や角膜は死体からのものでいいんですね。もちろん脳死の人からの方がいいのは当然でしょうけれど、肝臓はどうですか。

屋嘉比 肝臓や心臓はやはり、脳死というところに眼がいかがるを得ませんね。アメリカのピッツバーグというところに、移植センターがありまして、そこは数年前まではアメリカ全米の移植の半分はそこでやっていたところなんです。そこに行っているお医者さんに聞きますと、毎日のように肝移植はあると。で、成功した人々の中での生存率は一年以上生きる確率が七五%ということでした。それらの人々は、移植をしなかったならば、絶対に死ぬ人であつたんです。さらに長い生存では、肝硬変でどうしようもなかった人が肝移植が成功して、もう五年以上も生きているという例もあります。

ですから、こうして臓器移植によって助かる人がいることを思うと、医者としては何とかしてあげたいという気持ちになるんです。で、医者の仲間の間では、死んでいる人を生きていると誤診するのはかまわないと。生きている人を死んでいると誤診することは大変なんだ(笑

い、という一種の不文律のようなものがあって、脳死などに関しても、そこはかなり、神経質になっているはずなんです。

尊厳なる生命と死

梶山 一方では、もう既に脳死と分かっている、しかも濃厚治療をやって生き延びさせる。その濃厚治療が医者さんにとって一番儲かるからだとの話もありましてね。私は本当かどうか知りませんが、そのように疑う人がいるんですね(笑)。

屋嘉比 脳死問題も含めて、一般に日本人には医療に対する不信みたいなものがありますね。だから何か、実験に使われているのではないかと、生命の尊厳という次元からずれたところで、何事かが為されているのではないかという危惧が、今のお話に出ていると思うのです。その意味では、医学自体がきちとした生命観をもち、医者自体も生命観を学んで、信頼の回復をしないと、臓器移植や脳死の問題はなかなか進まない側面もありますね。医療の哲学史のようなものも、しっかり医者が学ば

つわるいろいろな生命現象みたいなものについては考えるチャンスがなかったですし、医者になってからも結構、忙しくて皆考える余裕がないので、自分達が脳死として提示している問題は本当に間違いないのであろうか、という不安を持つてはいるんです。

それで、一つの医者の考え方というか感じ方の問題として次のように捉えるのはどうかなと思うのです。

たとえば、臓器移植の場合ですが、割合に、医療の現場は実際、臓器を取り出して別の人に提供するということが、科学としての医学から考えますと、クールに成功するかしないかということとなり、一人でも成功率が高くなればなるほどよいということになるのですね。しかし、臓器を取り出して別の人に提供するという際、提供した時点で確実に一人の死(脳死の場合はすでに死んでいます)は、さらにもっと決定的になると同時に、もう一人の人の生は蘇るかもしれない、という意味での生と死の逆転が起こりうるかもしれない、ということの意味の重さですね。我々医者がともすれば、クールに手術の技法として捉えがちな臓器移植において、ある人から

なければならぬ時代になっていると思うのです。最近もある大学病院の医者が、老人の保険金目当てに、腎臓移植をしてやるからお金を出せ、と言って詐欺を働いていたという事件がありました。これなどもますます医療や、医者に対する不信をつのらせることになるんですね。

梶山 脳死とか臓器移植そのものよりも、その周辺に起こる社会的とか倫理的とかの問題の方が実は大きいですね。

屋嘉比 医者がよく言うことですが、人間が死ぬということ自体は大変深いものであろうというのは、医者自身も何となく感じていると思うのです。ただ、具体的に脳死の問題を突きつけられた時に自信を持ってないところがあるんです。というのは、「いったい、人間の死とは何か」という根本的な課題に対する理解の仕方に問題があるからだと思うのです。

我々、医学部の教育の過程でも、死についての勉強はほとんどないといって過言ではありません。教えられることは、呼吸が止まる、心臓が停止する、瞳孔が散大する、という、いわゆる三徴候ぐらいです。だから、死にま

別の人へと命の重さを伝えることができた、ということの意味を深く感じていけるようでありたいですね。

梶山 そうですね。その通りですね。

屋嘉比 それが脳死問題などでも、医者の生命への畏敬の念を根本にした倫理観といえますか、医療の重みといえますか、その点をもう少し反省していかないとだめだと思えます。また、これを提供する側からいえば、臓器を提供するという点において、自分の体に対してある意味の執着は避けられないと思えますね。

梶山 医者の方が、今あなたの言われたような気持ちで、生命がこちらからこちらへ移っていくのである、というように厳粛に考えていただけならば、提供する側も、本来自分と他人の区別があるわけではないのですから、こちらの命をあちらに移すというように考えていくべきである、と思うんですがね、私は。自分の命や肉体に執着する、たしかにそれは人間の基本的な迷いだとは思いますが。だからこそ、仏教徒として考えた時にはそういう迷いを越えるという、そして自他の差別のない世界に生きようとする必要があると思うんです。

この間、アメリカのカリフォルニア大学のホスピスを
している先生の講演を聞いたのですが、アメリカでの調
査によると、どのような人が死ぬ時にあまりあわてない
で、いわゆる尊厳をもって死んでいけるのかというと、
花とか動物の好きな人とか、もう一つは自然を愛すると
か、そういう人は死ぬ時に平静に死んで行けるというん
ですね。これを聞いて、直接には宗教とか仏教には関係
ないことですが、やはり、仏教にも通ずるものがあるよ
うに思ったのです。仏教でもいろいろな言い方をします
が、大乘仏教では最後には自分が宇宙の真理のようなもの
と一体になると言いますね。自然を愛するというのと仏
教的な法性とか真如とか法身というものとすぐに一つに
はできないにしても、やはり通ずるんですね。最後はや
はり、宇宙的な生命と自分が一つとなって、そうなれ
ば自分という個体が死んでも今度は宇宙的な生命として
生きていくんだということですね。つまり、死んでも死
なないというような気持ちでてくるはずなんですネ。
もちろん、このことは、それぞれの人が自分の問題と
して考えていかなければならないことで、他人にどうこ

死の命」ということでしょうか、これはどこまでも感得
の問題であると思うのです。死に際して、それまで執
着していた自分の肉体や自分という意識が無くなってし
まうわけで、そのなくなる恐怖を乗り越えるということ
は相当難しいのではないか、と思うんですが……。

梶山 仏教から言えば、自分の生命とか肉体とかに執
着するというのは、やはりよくないことですね。

肉体や生命に執着しないというのは、たとえば、大燈
国師が死ぬ時には、足が不自由で膝が曲がらなかったの
ですが、結跏趺坐して坐禪して死ぬと決めて、自分の足
を自分で折って、そして、血まみれの姿で坐禪をしなが
ら、しかも、しっかりと弟子たちに教を残して死んで
いつているわけです。まあ、そこまでいくと非常に凄絶
な感じがしますがね。自分の死を尊厳にして亡くなって
いく人が昔は多くいたし、今も実はいるんです。しかし、
だから、お前もそのように死ぬ、とは言うわけにはいか
ない。自分の覚悟としては自分の死に方をどうするかは
常日頃考えていて、あまり間際になってから、自分の生
命や体に執着するというのはよくないと思います。生き

ういうことではないのですがね。

屋嘉比 「自他彼此の心なく」と、仏法では言います
が、我々凡人から考えますと、自分の自我への執着がど
うしても出てまいりまして、そこをどうこえるかという
ことが、日常的にも自分の人間的な課題であるというよ
うに思います。で、先生が今言われたことというのは、
ある意味では「悟り」ということではないのでしょうか。

梶山 ええ、悟りと言つてよいと思うのですがね。そ
れは執着はありますよ、誰だって。しかし、やはり道元
の言つた「念起れば即ち覺せよ」でね。執着があつた
らまずその自分の執着に気付くことですね。それが始ま
ります。自分が何か悪いことを考えて、あるいは自分が
何かに執着しているということを気付かない人は、これ
はどうしようもないんですね(笑)。自分で気づけば、そ
の執着を絶ち、捨てるということもできないわけじゃな
い。そういう形で、仏教の信心に近づいていくというこ
とを我々としては勤めるほかにしようがありません。悟
つたところまではなかなかいきませんがね。

屋嘉比 いま先生がおっしゃったことは、いわば「不

ているといつても、たかだか百年ですから、そういうこ
とも考えた方がいいと思いますすがね。

臓器移植の問題でも、心臓の場合、心臓移植を受けて、
一番長生きした人が十三年と書いてありました。この
間、十八年という記録を見たのですがね。これなど、例
外的に長いんでしょう。何か、それだけのことに、あわ
てふために命を延ばそうとするなどは人には言えませ
んが、自分の覚悟としては、それぞれの人が自分はこの
したいということを考えてもいいと思いますすがね。

自分の覚悟として自分が脳死になった時には、臓器を
さしあげますと文書にしておくのも、それと同じこと
です。

昔から、ジャイナ教では自分の体が衰えて、自分が人々
の役に立たないと分かれますと、皆断食して死んでいつ
たのです。それがジャイナ教の僧侶の慣習となつていた
わけです。しかし、それはジャイナ教だけではなく、仏
教の中にもそのような見事な死に方をする人は昔もたく
さんいたし、今でもいるわけです。そういうことをする
人は言わないだけです。見ていれば分かるのです。私の

周囲にもいます。

私の先生であった久松真一という人は、死ぬ一週間位前まではちゃんと座って意識がはっきりしていた。ところが、ちょうど九十歳になって、私は自分の先生であった西田幾多郎先生より長生きしたと言って、そして一週間後に静かに亡くなられたのです。

久松先生はいつでも、僕らがいくと、私は絶対に死にませんと言われていたのです。死なないというのは、それは宇宙的な真理と自分は一つになっている、肉体が死んでも自分は生きているんだということです。久松先生は、まず死体は火葬にしろ、お墓は作るな、灰は捨ててしまえ、碧落に墓碑を書けと書き残していました。碧落というのは空のことです。空に碑文を書け、という意味なんでしょう。大変、見事な死に方でした。

また、木村無相という人がいて、この人は死ぬ三年前に生前の葬式をやってしまい「〇月〇日に死にました」と書いた葉書を刷って、宛名を全部書いてあって、自分が本当に死んだらその日付を書き入れて出してほしい、と知人にあづけて死んだのです。亡くなった時には、葬

式は三年前に済んでいますから、私たちはどうしていいかわからなかったですがね。で、百力日法要だけは有縁の方々が行うというので、その時に我々も行ったんです。こういうような人達の死に方はなかなかできませんがね。それぞれ自分の死なんですから、常々考えておきたいとは思いますね。

この前、私の近所の酒屋さんのおじさんが死んだのですがね。非常に立派な人だいつも思っていたのですが、白血病になったことを知っていたのですが、病院で死ぬのはいやだと言って、家に帰ってきて二、三日して亡くなったんですがね。それは見事でしたよ。

現代人における死の問題

屋嘉比　そこで問題になるのが、現在、ほとんどの人が病院に入って死ぬわけですが、何か、自分で主体的に死に方を選択することが難しくなっているところがあるんですね。特に、レスピレーター（人工呼吸器）が初めて出た時期が何年前にあり、その頃はとにかくこれを付けるという時がありましたが、最近では少し反省が出て来

て、何でも付けばいいというものではない。なぜかなら、人の死というのはさまざまであり、その人なりのよい死に方があるはずであるから、ただ時間的に、物理的に生命を延ばせばよいというものでもなろうと。それを考えますと、脳死であれ植物人間であれ、とにかく生かせ続けるということは逆に、人間の尊厳を侵していることになるのではないか。それまで頭を使っていた人が全く使わなくなったにもかかわらず、ある意味では機械のスパゲッティ（症候群（笑））、という形で生かされていると。それで生かされているのは本当に生かしているの

であろうか、ただ医者の手先な考え方で生かしているだけではないのであろうか、どういう形で生かせることが生命の尊厳になるのか、人間を尊厳視して治療していることになるのか、といったさまざまな根本的な反省が起こってきていますから、今こそ、ますますこの点を振り返り、深く掘り下げる時がきているように思うのですが……。

日蓮正宗の第二十六世の日寛上人が『臨終用心抄』という書の中で、死ぬ時が問題なのだから、普段から「臨

終只今」ということで準備しているということ、死ぬ瞬間ということの二つが非常に重要ですよ、と戒めておられる。しかも、いずれも普段の生き方が重要であり、また、普段の生きざまによってしか作れないものですよ、と仰せられているんですね。

死というのは、自分の人生の最後の完結点であり、目標地点でもありますので、やはり、死を考えると自分なりに生を理解して生きていくことはむしろ生も充実させるとともに死に対しても迷わずに次の生へと渡っていけるような準備になるのではないかと思うのです。

そのことに関して、現代人の死に対する向かい方の典型的な在り方として、非常に印象深かったのは岸本英夫さんの『死をみつめる心』という本でした。大変な宗教者で、世界のさまざまな宗教についてよく知っておられたし、宗教で説く生命の三世観もよく御存知であったと思います。しかし、岸本さんは、いわゆる近代教育を受けて近代的な知性を持っている人間には、宗教に説かれている生命の三世観をどうしても信じられない、自分が信じられない以上、あいまいな気持ちのまま、三

世の生命観に死後を期待するわけにはいかない、とあえてそのような立場に立たれるんです。そして、今ある生をよりよく生きる以外にないんだと結論されて、それ以後、仕事をものすごい勢いで為されて、そして亡くなられた。岸本さんは死の宣告を受けてから死に至るまで克明に非常に冷静に、死というものを見ておられて、大変、勇気のある方だなとは思いますが、ご自分の勉強なされた宗教そのものをあえて用いようとされなかったというところがあり、三世の生命が信じられないというところがある、ある意味からいうと現代人の生き方の典型と言えるんですね。今の日本人はそのような方が多いと思うんです。つまり、三世ではなく、今世限り、という立場に立ってしまうことですね。私などは、そのような現世限りのような立場に立ってしまうと、死に対する不安、恐怖というか、自分がこれで消えていくというようなこわさというのを乗り越えられないのではないかと、と思うのです。

今世限りと思う人と、たとえば阿頼耶識がこの生から次の生への橋渡しであると本当に信じられる人とは、死

そのものの捉え方が自ずから異なってくるわけですね。キューブラ・ロスというアメリカの精神科のお医者さんで、死ぬ人へのインタビューを続け、本当に死んでいく人たちの悲しみを全部拾い上げつつ、死をいかに受容していくかというのを研究している方ですが、彼女自身、この仕事と研究を通して自分の生命感が変わったという経験の持主なんですね。つまり、インタビューする前には、生というのは今世限りであると考えていたのが、インタビューの後では、死後の世界があると考えようになったというのです。

実際、今世限りで全て終わるというのではなく、何らかの形で、死を超えてつながっているものがある、と感じ信じられることは非常に重要だなと思うんです。そういう意味でこの現代の社会で、どのようにすれば死についての考え方を確立することができるのか、についてお聞きしたいのですが……。

梶山 それは二つあると思うんです。

自分が死ねば阿弥陀仏に救われて極楽に生まれるんだ、とそれを信じている人はあると思う。それはそれで

いいんです。仏教の真理というのは、そのまま真理という形ではあることができないんです。何か、一つの器とか乗り物という具体的な形をとらないといけない。真如とか法性とかがあつて、それがそのままでは普通の世間の人には通用しない。となれば、真如が阿弥陀仏という形を方便としてとって、それを媒介にして真如の世界へ普通の人を引き入れるということです。だから、阿弥陀仏を信ずることのできる人はそれでいいのです。

ところが岸本先生のように非常に知性の強い人というのは、どうも他界というのは信じられない、極楽というものも信じられないと。そういう人はそういう人で極楽の本当の意味は何かと探っていく。極楽というのは極楽がばつんとどこかにあるのではなくて、法身という宇宙的な真理があつて、それが方便として極楽の形を取って、そして我々を救うのである。そこまで理解すればいい。そうすればどちらの道を行こうが同じことになるんですね。僕はやはり仏教徒としてはそのいずれでもいいと思うんです。ただ輪廻を信じろ、極楽を信じろといっても、通じない人はいますよ、たくさん。そういう人はそういう

う人なりに輪廻や極楽、阿弥陀仏などの概念は新しく解釈できるのでから、その解釈を自分のものにすれば極楽を信じなくても、それと同じような形で救済されるということはあるんです。これを仏教では真諦と俗諦というのですが、二つの道が仏教にはあると思うのです。

その意味では、鎌倉仏教の祖師方というのはそれぞれ見事ですすよね。

屋嘉比 突然死とか事故死とか癌で苦しんで死ぬとかの場合の準備として、常日頃から、死を向かえる心構えを作っておくということは大切であることは確かなんですが、死の一つの理想的な在り方として、意識もありませんが老衰のように、自然に命が尽きるというのが、一番いいのではないかと考えるのです。それが「臨終正念」、つまり、臨終においても正しい念で死んでいける、という意味にもあたるのではないかと、とも思うのですが……。

梶山 それが理想的であることは確かです。しかし、各宗派それぞれの祖師は言っていると思いますが、たとえば真宗の場合、本願寺第三代にあたる覚如という人ですが、どういう理由で、人間は死ぬかは分からない、そ

世の生命観に死後を期待するわけにはいかない、とあえてそのような立場に立たれるんです。そして、今ある生をよりよく生きる以外にないんだと結論されて、それ以後、仕事をものすごい勢いで為されて、そして亡くなられた。岸本さんは死の宣告を受けてから死に至るまで克明に非常に冷静に、死というものを見ておられて、大変、勇気のある方だなとは思いますが、ご自分の勉強なされた宗教そのものをあえて用いようとされなかったというところがあり、三世の生命が信じられないというところがある、ある意味からいうと現代人の生き方の典型と言えるんですね。今の日本人はそのような方が多いと思うんです。つまり、三世ではなく、今世限り、という立場に立ってしまうということですね。私などは、そのような現世限りのような立場に立ってしまうと、死に対する不安、恐怖というか、自分がこれで消えていくというようなこわさというのを乗り越えられないのではないかと、と思うのです。

今世限りと思う人と、たとえば阿頼耶識がこの生から次の生への橋渡しであると本当に信じられる人とは、死

そのものの捉え方が自ずから異なってくるわけですね。キューブラ・ロスというアメリカの精神科のお医者さんで、死ぬ人へのインタビューを続け、本当に死んでいく人たちの悲しみを全部拾い上げつつ、死をいかに受容していくかというのを研究している方ですが、彼女自身、この仕事と研究を通して自分の生命感が変わったという経験の持主なんですね。つまり、インタビューする前は、生というのは今世限りであると考えていたのが、インタビューの後では、死後の世界があると考えるようになったというのです。

実際、今世限りで全て終わるというのではなく、何らかの形で、死を超えてつながっているものがある、と感じ信じられることは非常に重要だなと思うんです。そういう意味でこの現代の社会で、どのようにすれば死についての考え方を確立することができるのか、についてお聞きしたいのですが……。

梶山 それは二つあると思うんです。

自分が死ねば阿弥陀仏に救われて極楽に生まれるんだ、とそれを信じている人はあると思う。それはそれで

いいんです。仏教の真理というのは、そのまま真理という形ではあることができないんです。何か、一つの器とか乗り物という具体的な形をとらないといけない。真如とか法性とかがあつて、それがそのままでは普通の世間の人には通用しない。となれば、真如が阿弥陀仏という形を方便としてとって、それを媒介にして真如の世界へ普通の人を引き入れるということです。だから、阿弥陀仏を信ずることのできる人はそれでいいのです。

ところが岸本先生のように非常に知性の強い人というのは、どうも他界というのは信じられない、極楽というものも信じられないと。そういう人はそういう人で極楽の本当の意味は何かと探っていく。極楽というのは極楽がばつんとどこかにあるのではなくて、法身という宇宙的な真理があつて、それが方便として極楽の形を取って、そして我々を救うのである。そこまで理解すればいい。そうすればどちらの道を行こうが同じことになるんでね。僕はやはり仏教徒としてはそのいずれでもいいと思うんです。ただ輪廻を信じろ、極楽を信じろといっても、通じない人はいますよ、たくさん。そういう人はそういう

う人なりに輪廻や極楽、阿弥陀仏などの概念は新しく解釈できるのでから、その解釈を自分のものにすれば極楽を信じなくても、それと同じような形で救済されるということはあるんです。これを仏教では真諦と俗諦というのですが、二つの道が仏教にはあると思うのです。

その意味では、鎌倉仏教の祖師方というのはそれぞれ見事ですすよね。

屋嘉比 突然死とか事故死とか癌で苦しんで死ぬとかの場合の準備として、常日頃から、死を向かえる心構えを作っておくということは大切なことは確かなんです。死の一つの理想的な在り方として、意識もありませんが老衰のように、自然に命が尽きるというのが、一番いいのではないかと考えるのです。それが「臨終正念」、つまり、臨終においても正しい念で死んでいける、という意味にもあたるのではないかと、とも思うのですが……。

梶山 それが理想的であることは確かです。しかし、各宗派それぞれの祖師は言っていると思いますが、たとえば真宗の場合、本願寺第三代にあたる覚如という人ですが、どういう理由で、人間は死ぬかは分からない、そ

れこそ今でいえば、交通事故で突然、死んじゃうかもしれない、あるいは脳死になって念仏ができない、ということになるかもしれない。しかし、そんなことは問題ではないのだ、今自分が阿弥陀仏を信じていてもう既に救われたのであるとの意識を持って、そうすれば、死に方がどうであろうとかまわない、と言っているのです。「平生業成」といって、平生の生活の内に浄土に生まれる業が成立しているという意味の言葉がありますが、これには、今言っているような、平生の生活における信仰の真つ只中で、もう既に救われているのであるとの意味もあるんですね。

だからむしろそっちの方が大事なんです。脳死とか事故死とかになって、間際に正念になれと言ってもなかなかできないから、普段、生きている時から、正念で自分はどう救われたという気持ちがあれば、死に方はどうでもいいんだ、と言っているのです。

屋嘉比 それは、自分がいつも悔いなき生き方をしてるので、今、死んでもいい、という達観でもあるわけですね。

梶山 その通りです。たとえば、お釈迦さんの仏教を小乗仏教が解釈しなおし、ある意味では墮落した、これを大乘仏教がもう一度、全く新しい解釈をして仏教を復活させるわけです。そのようなことが次から次へと、ある教義を全然捨ててしまうのではなくて、教義を解釈しなおしては、また生き返るといふ、その繰り返しですよ、仏教の歴史というのは。だから、輪廻の問題や業報の問題、極楽の問題を再解釈して一向かまわないわけです。極楽がないと思ったら本願寺から破門されるようなことでは(笑)、困るわけです。

屋嘉比 先ほども、先生は唯識派の意識に偏った阿頼耶識を体を含めた生命のように解釈していくことを述べられましたね。

梶山 だから、脳死や臓器移植などのさまざまな今日的な問題と取組みながら、仏教の精神を生かしつつ、解

梶山 そうですね。難しいですけどもね。でも、どんな死に方をしても、もう救われているんだとか、もう死なない生命と一つになったんだ、という気持ちを普段から持てるように、心掛けなければなりませんね。それが仏教徒としての生き方でしょう。

屋嘉比 そのことと関連して、最近、デス・エデュケーション、死の教育、ということが提唱されていますね。日頃から、死への心構えを作る意味からも、その必要性を痛感するのですが……。

梶山 そうですね。その前に、まず、デス・スタディ、つまり、死そのものの研究を徹底して行うよう、いずれ提唱したいと思っておりますがね。

現代に果たす仏教の役割

屋嘉比 なるほど。仏教はまさに人間の死苦との対決から始まった宗教ですからね。

最後に、仏教の今後の問題をお聞きしたいのですが、今日、話題になりました脳死、臓器移植、体外受精、遺伝子操作などの問題は仏教の経典が作られた時代にはな

釈を変えていく。それがないと、宗教は生き残れません。たとえば、輪廻説ですが、現代でもインドとか東南アジアなどの人々は信じている人は多いと思いますけれど、これだけ、世俗化した日本の社会で輪廻説というのをそのまま信じる人が何人いるかといえば、それは問題ですね。その場合、私はね、輪廻説というのを新しく解釈しなければならぬと思うんです。それは、現在のこの自分の存在というのが、自分の親からおじいさん、ひいじいさんというように無限に過去につながっている。それから、自分の今の存在が子へ、孫へ、そして曾孫へと無限に未来にもつながっていると。これはいわば縦の関係ですね。それと同時に横の関係というのがあって、現在の自分の存在が友人だとか家族とかいうものを通して、無限に広がっている、そういう命が自分なんだ、と捉える。さらにいえば、五蘊説は自分と他人との区別がなくなくなってしまったような世界でしたが、これはまあ、空間的に横に自他の区別のない無限の世界へと広がっているということですね。今度は輪廻というのは、過去から現在、未来に縦に時間的にか、無限につながって

ということですが。そうすると、横にも縦にも無限の連鎖のなかで生きているということですから、そこでは今の自分を中心であるという意識がなくなってしまうのですね。そうすればそこから当然、愛、慈悲というものが出てくるわけで、そういうものとして輪廻説を考え直していかなければならないと思いますね。

ただ昔のように、いいことをすれば幸福な生まれ方をし、逆に悪いことをすれば地獄に堕ちたり、不幸な生まれ方をするんだというように、個人的にだけ考えるということはね、もうやめてもいいんじゃないか、と思います。やはり、宗教の教義というものは、時代に応じて、ある意味での非神話を行わなければならない。神話を非神話化するというのは、神話を捨ててしまえというのではない。それでは子供を行水させて、そのたらいの水と一緒に子供まで流してしまふ(笑)、のと同じでして、やはり昔の輪廻の解釈に対して、今度は我々の世界で納得できる新しい解釈を出していかないといけないんですね。

屋嘉比 アメリカなどで、キリスト教などは意見をい

い、ローマ法王が脳死を認めるとか認めないとか、いろいろやっていますね。

梶山 それはアメリカだけではない。ローマ法王のカトリックの変身というのは見事なんですよ。たしか、二十三年位前になりますね。それまで非常に閉鎖的であったのが、急に他の宗教との交渉をやりだしたし、仏教の勉強をしているカトリックの神父はたくさんいますしね。他の宗教のアイデアをどしどし取り入れることをやっていますし、今の医学上の問題にも非常に積極的に対応するでしょう。その意味でカトリックは生きた宗教であると思いますよ。そこへいくと、仏教の方が見劣りますね。

屋嘉比 やはり、仏教の方が遅れている点がありますね。そういう意味で昭和六十二年から『東洋学術研究』(第二十六巻第二号、第二十七巻第一号、第二十七巻第三号)に三回に渡って連載された池田名誉会長の「脳死問題に関する一考察」なども、一つの仏教側からの新しい試みである、と私たちは思っております。これは仏教の新しい解釈による生命観に基づいて、現代の事象にコミットし

つつ展開されたもので、こういう仕事は今後ますます重要になってくるであろうと考えています。

梶山 なるほど。昭和六十二年に書かれているというのは早いですね。日本の宗教界で脳死や臓器移植の問題が騒がれ出したのは去年ぐらいですからね。去年、日本印度学仏教学会に政府関係から脳死問題に関する諮問があったのですね。それから騒ぎ出したんです。

屋嘉比 深い生命観を持ち、生死の問題を徹底して究めようとしている仏教のことですから、今、先生の言われたように、どしどし再解釈していけば仏教にも脳死問題など、現代の課題を解決する力と成り得る可能性は十分にあるということですね。

梶山 その通りです。

——今日は長時間、ありがとうございました。

(かじやま ゆういち・仏教大学教授)
(やかび こうじ・帝京大学助教授)